

市長コラム

～ 魅力ある地域づくり～

Vol.41



夏本番となり、暑さが厳しい時期を迎えました。今年の夏も昨年と同様に猛暑となることが予想されています。市では、一時的に暑さをしのいで涼しく過ごせる場所として、12か所の公共施設と市内15か所の郵便局を「涼み処」として9月30日まで開放しています。熱中症の危険から身を守るため、ぜひご利用ください(6・7ページ掲載)。

★五所川原立佞武多がいよいよ開催！

いよいよ当市最大の祭りである五所川原立佞武多が8月4日から8日までの5日間開催されます。今回の新作大型立佞武多は、通算25台目の節目となります。題材は「閻魔」となっており、仏教で地獄の王とされる閻魔大王が、生前の行いを映す浄玻璃の鏡を前に、裁きを下す場面を表現しており、未来を担う子どもたちに正しい道を示すという思いが込められています。

制作者は、ねふた表現師・忠汰こと齊藤忠大氏で、これまでも「歌舞伎創生 出雲阿国」「かくや」など独特の世界観をもった立佞武多を制作しており、まさにねふた表現師たるゆえんであると思っています。今作も美しい色彩と迫力が同居した期待を裏切らない出来映えとなっています。

今年の五所川原立佞武多は、初日となる4日に、昨年に引き続き宮下宗一郎青森県知事が、最終日となる8日に吉幾三氏が5年ぶりに参加することとなり、例年以上に盛り上がるものと大いに期待しています。ぜひ多くの方にお越しいただき、「ヤッテマレ、ヤッテマレ」の掛け声のもと、勇壮な運行を思う存分お楽しみいただきたいと思います。

五所川原立佞武多は、明治時代後期に当時の豪商や大地主の富の象徴として、高さを誇るために作られていたねふたが、平成8年に「立佞武多」として復元され、平成10年に現在の形の夏祭りとして復活しました。

その過程において、立佞武多の祭り開催の意義について色々な議論がなされた結果、青少年の健全育成に資するものとして開催するとし、私も携わる一人として、その意義を大切に、今後も祭りにしっかりと思いを込めていかなければならないと考えています。

近年は、より多くの子どもとその家族が参加できるように、五所川原青年会議所が「親子de立佞武多」

を企画するなど、開催の原点である“子どもが楽しめる、子どもに開かれた祭り”を実現できていると実感しています。

★それぞれの地域に根差した伝統の祭り

さて、地域全体に目を向けると、五所川原、金木、市浦、それぞれの地域にその風土に根差した伝統の祭りがあり、その多くが青森県や当市の民俗文化財として指定を受けています。

五所川原地域では、「五所川原立佞武多」のほか、「虫おくり」「五所川原甚句」「飯詰稲荷神社祓参り」「浅井獅子(鹿)踊」「漆川獅子舞」「飯詰獅子舞」、金木地域では、「嘉瀬奴踊」「金木さなぶり荒馬踊」、市浦地域では、「相内の虫送り」「相内の坊様踊り」「十三の砂山踊り」が指定されています。

例えば、先月号でも少し触れましたが、五所川原、金木、市浦のいずれの地域でも伝承されているのが、五穀豊穡と無病息災を祈願する『虫送り』です(※金木地域の指定名称は「金木さなぶり荒馬踊」)。

去る6月、3地域の虫送りが開催され、私はそれぞれを激励のために訪れましたが、いずれも地域の方が愛着をもって協力して取り組んでおり、たいへん強く感じました。一方で、後継者がいないなど、様々な事情により、残念ながら、継続した活動が難しく、休止となっているものもあります。

地域の伝統的な祭りの伝承には、その地域特有の歴史や文化、そして人々の生活や思いが詰まっています。

人口減少社会において、子どもたちが一度は地元を離れたとしても、「いずれは生まれ育ったふるさとに帰りたい」、そう思えるような地域社会をつくるためには、子どもたちが地域の伝統について学び、魅力を感じることができるよう取組を行政が積極的に実施する必要があると考えています。子どもたちが自身のルーツを学ぶことが、地域に対する愛着、誇りを育み、子どもたちのアイデンティティの形成を手助けします。

そのためにも、今、実施している祭りを守ると同時に、やむを得ず休止となっている祭りを、地域の力を借りながら、伝承、復活させていかなければならないと思っています。



今年の金木町虫送り



今年の相内虫送り